

◎春の夜のそとろあるき

第三年級 白井敬治郎

ふみよむ、窓の障子にうつれる、おぼろげなる、花のかげに心うかれて、庭を出て、地にうつれる、已が影ふみつゝ、何處へゆくとも、定めずさよひありくゝ、何時とはなしに、暗き森の所にぞ、來りける。折りしも、遙かあなたに、かすかなる笛の音聞ゆ。峰のあらしか松風か、はた、また、たかすさひよかわらんぞ、おぼつかなくも、靜に森の中に入りけるに、其人は、心付かてやありけん、ひたすらに吹きすましたりやうゝ近づきて、見れば、吾が親しき友垣なり。竊ま、後に回りしに、彼も、心付きたりけん、ふきやみて、吾を顧み、君は何處へか行く、と、問ふ。浮雲のゆくへ定めずと、なん笑ひつゝ答ふれば、花木山の花や、如何よ、といふ。さらばとて、打ち連れて、そなたに向ひぬ。

道のべの、芝草ふみしだきつゝ、ゆきつきぬ。此處は、世に、花木山と、呼ばれたる人の、花木くさゝ、植ゑ並へたる所なり。樹下に佇みて、見渡せば、大方は、開き、盡せる様なるか、露を帯びて、きら／＼と月の光を宿したる、恰も花ひらに、黄金の玉を附けたらんか如く、美しとも美し。友とちの試に、手もて搖かせば、數百千の、白玉一時に、落ちて、木の下に草に碎くるさま、いと面白し、傍の石に、腰うちかけて大空高く見上ければ、實や、照りもせず、曇りもはてぬ、春の夜の、とはうべも言ひ出でけるかな、とおほゆ。四季折々の、いつはあれど、霞の中の春の月こそ、此の上なう、面白けれ。譬へば、やんごとなきあたりの、人を、簾内に望むか如く、風に、ほふ、花の香は、翠簾をもるゝ、たきものかと、うたがはれぬ。かくて、彼の、友人はあなたの木の根に寄りて、例の笛をふきすませり。時うつりて四隣靜に。人語さへ絶ぬれば家路につきぬ。

◎春の野邊

第三年級 山本繁七

うら／＼とさしのぼる旭の影の麗らかなるに、野邊の景色思ひやられて、いざ、日頃の鬱をはらさばやと、いふせき宿を立ち出で、吾柴折戸を潜り出でぬ。見渡すかぎり春めきて、遠近の山々は霞棚引き、路の邊の若草は、春風に萌ゆる出で、いと心地よし。八重霞こめたる彌生の空、雲井に鳴く雲雀の聲、笑みを含める櫻の花、目に見ゆるもの、耳に聞ゆるもの、欣々として吾を迎へぬ、足まかせて漫步せしが、やがて、暫時木かげに、身を寄せて休らへば、彼方の麥畑は、青海原の浪をたゞよはせ、農夫の語は雲雀の聲と和して、いと面白く聞ゆ、又新燕のあちこちと、花の上を飛びまはるなど、春の心の長閑なること云はん方なし。菜の花の此方の園に咲き亂れたる、さながら黄金敷きたらんかと疑はれ、此の色香にさそはれて、飛び狂ふ蝶の二つ三つ、追ひつ追はれつ戯むるゝも、いと長閑になむ。

年頃十一はどなる乙女子の愛らしき顔に、ほ／＼かむりして、花籠に莖の花など摘みて、連れだちし妹と興へなどせる様、罪なしとも罪なし。

吾も春草摘みて、家づとにせばやと、そこはかどなくたどりて、重たんほ／＼など摘みてき、暫しの程に籠に満ちぬ、折しも晝食の鐘の音聞ゆ、あはれ春の野に浮れ出で、花にたはむれ蝶追ふは、いと興あることにて樂つさねど、空腹となりては、野に居るべきにあらねば、あかぬ心を殘して、家路に向ひぬ。

◎秋之一夜

第三年級 勅使河原佐太郎

光陰は、白駒の隙を過ぐる如しかや、あはれ春の花も夏の緑も、一時の夢と過ぎて、今は、はださむき秋の夕とはなりぬ。

秋は荒野のすすき虫の聲、見るにつけ、聞くにつけ、只物かなしく覺ゆるに、まいて月など凄く照せる夕は誰か哀を催さうらん。

今宵も、業におはれて夜更るまで机に向ひぬる程に、孤燈の油、いつとなう盡きなんとして、灯細くなり行けば、心細さに讀む文を閉ぢて机に凭れぬ。

世はたゞ靜かなるまゝに、しわがれて鳴く虫の聲も、心にしみわたるやう覺えて、果敢なき虫の身を思ふにつけ、我が身人の身の哀なるとども、つぎ／＼に浮び出でられて、いみじうかなし。

立ちて窓を開けば、一面の野山はすすき月影をあびて、一むら二むらの枯木立、ちらほらせるすすきの白穂など、眺むればいよく哀ぞささりぬる。

折しもさど吹く風、軒端を拂ひゆけば、梢に残る枯葉一ひら、二度三度翻へるよとみし間に、庭前の流れに落ちて跡なし、嗚呼、觀すれば草木尙榮枯の數に洩れざるなり、人生たれか死なからん、死生は人の常なり悲むたらんや、然れども吾が業は未だなかならず、此のまゝに老いて、一片の落葉と散りたらむには、奈何にせむなと思ふうち夜もいたく更けぬ。

ひさかたのそらすみ渡る月影もおぼろにかすむわがなみだかな

◎吾が舊師

第三年級 川瀬政七

凡そ生きたし生けるもの、誰か死なからん、鳥獸畜類より草木にいたるまで、始ありて終なきはあらじを、今更なげくもよしなきことなるべし、されども事未だ終らずして有爲の才を抱き、無限の涙を呑みむなしく遠郷の客とならんには、其悲みいか許りぞや、あはれその人の心の中思ひやるだに、胸を刺す心地をする、

我舊師松宮先生は、實に去年の五月この世を去り給ひぬるなり、吾等尋常小學を卒へ、高等小學に進みし以來、四星霜の間先生の薫陶をうけたり、先生人となり温厚篤實、生徒を教ふるに諄々として倦み給はず、一校の生徒皆先生を慕仰せざるはなかりき、先生齡未だ老いたりとせず、益教育に盡すところあらんとせられしが一朝病魔の犯すところとなり、終ゝ起ちたまはざるに至る、

夏も過ぎ、いつしか秋風立ち、雲井の雁の歸るを見るにつけ、過ぎし事の思ひ出されて、こいしさのあまり胸ふさがりて、夜は更けぬれど眠られず、枕邊の机にもたれつゝ筆とりてかくなむ。

◎琵琶湖の月

第二年級 東野修

月は秋に、秋の月は水にこそまことのながめはあれと思ひ居たるに、けふ中秋の空はれて、月もよく、水もよし。いざと同じ心の友をかたらひ、程近ければ、にはの海に舟を出しぬ。空を望めば月はさやかに澄み渡り、あまのつり舟ゆき／＼して、鱸のひゞき廠の音も通ふもをかし。遠き磯山はうすぎり夢の如くに淡く立ちこめて、誰が繪ける淡墨か。近き濱邊の松風は、天女の撥音空にひゞくにかとゆかしく覺ゆ。月の光は海に碎けて黄金をはらし、凝りては水晶を流すが如し。影を追ひて船をやれば月はいよく照りまさり、水の底まで見ぬすきて、天の海原の雲は白帆か、水や空なる心地して、船は月をさして登るに似たり。千里を照らすこの月影は、おなじく父母の仰ぎますらんと思へば、戀しき故里はかなたにかと見渡されて、袖には秋の露しげし飽くまで、月も見はやしつれば、我が船はもとの濱邊にかへりつきぬ。くがに下り立てば月はなほ限なくさな渡りて、限りを知らず。松の梢を吹く風に送られつゝ、家に歸り、床もふせども、眼さめてねむられぬまゝに、筆とりてありしことも、書きつづけぬ。

◎城山よ登る記

第一年級 野間莊三郎

彦根町に建てる金龜城は今より三百年前井伊直政公の築く所にして今尙ほ天主閣の巍然として山上に聳ゆるを見る余嘗て金龜山の勝景を耳にすること久し然れども未だ一遊を得ず常に之を遺憾となしき今回當地に来るに及び一日學友數輩の誘ふ所となり俱に手を携へて寓居を出で歩を城山に運ぶ既にして中學校の門前を過ぎ内壕に架したる橋を渡りて羊腸たる山路の樹陰涼しき所を登ること數町にして神武天皇遙拜所に至る此所は一面は緑色の毛氈を以て敷つめられ老松是に生じ清風衣袂を拂ふ神心實に爽快なり、夫より橋を渡りて隅櫓を通過すれば傍に鐘あり、番人ありて常々此鐘を以て時を報ず、既にして天主閣の下に達す、傍々三四の掛茶屋あり、天主閣の頂上に登りて四方を見渡すに前面一帯は茫々たる琵琶湖にして遙に淡墨を刷きたる如き湖西の連巒を望見し、多景島は指顧の裡に在り、竹生島は遠く右方に見ゆ湖面は、あせざる紺青の水を湛へて靜に細波を寄せ來り天空の碧色と相映じ其間を眞帆片帆行きかふ舟の點々たる鷗の如く時に漁船の一縷の黒煙を噴きつゝ、遠く彼方の湖上に疾航する様畫くとも筆には及び難かるべし眼を轉じて後方を眺むれば眼下に樂々園、八景亭の美を瞰し招魂社の壯嚴なる中學校の宏壯なるを望むべく彦根の繁盛なる市街を望むべし、遠く田園相連る所麥の青き蓮花草の紅なる、近く佐和山の緑滴るばかりなる、遠く國境の諸山黛の如き、其間を漁笛一聲黒煙を噴きつゝ疾走する漁車など、水陸の景相俟ちて得も言はれぬ眺めあり既にして夕陽西山よ沒せんとし晚鶉啞々として樹林に向ひて飛び去る、余等も亦愛を割きて相俱に歸路に就けり。(五月十五日稿)

Hayashi Rasan.

BY S. HIROSE. (FIFTH YEAR CLASS.)

Hardly any passage in history has struck me more than the life of Hayashi Rasan. He was born in Kyoto during the first period of Tokugawa Shogunate. He was naturally sagacious, and constant study, moreover, followed it. So his projecting public spirit already appeared from his infancy, which afterward made Ieyasu so fond of him, that the latter received him, as a scientist with all possible favour and patronage.

Indeed it might be said, that all kinds of adjectives of such signification as intelligent, circumspect, excellent, ingenious, etc, were involved in Rasan.

Once a violent fire occurred in Yedo and damaged most part of this city.

This calamity is known to us, as the Meireki fire to this very day.

It being near Rasan's dwelling, one of his disciples gave the alarm, when Rasan was just in the midst of his attention in reading.

Either by his age or zeal, it seems, he was wholly ignorant of the information; so he still was continuing his work as before. It would have been a spectacle well worth being present at, to see this circum-

tance Rasan leaning on the table calmly, when the fire was coming almost over. The wind became

violent, and the worst was believed to be approaching. Then the disciple came again, and repeated

the same, in hastier tone than before. This pitiless conflagration, at length, invaded his copper-ware

-home, in which, there were various works completed by his assiduous toil for several years. Five days after this event, he died at the age of seventy-five after serving great many public duties. Look at this profound spirit in that occasion of this fire. It easily can be seen, that there was nothing in his mind but industry.

Then, look at the present condition of our state. You would find so many differences between the present and the past. Now society is advancing with rapid strides in her civilization since the Restoration, day after day and course of learning also in proportion. And, then, why we would seldom meet with such successful student as Rasan? This is needless to suspect. Doubtless, it is owing to the contentment of a little success or petty ambition.

Indeed, what matter it may be, the splendid success accompanies to the firm mind, — unflinching patience and dogged perseverance.

I hope, then, what reverse attacks you, do not fear at her assault, and break her off, because this is the trial one should experience.

◎漢詩

◎送菊池仙湖之南京同文書院

市瀨 雨山

方便山下昔驚秋。評定橋頭時歎流。十道風光君未屢。颺然又向古中州。

方便山聳於山口西北。評定橋架於仙台廣瀨川。君初爲山口高等學校教授兼舍監。後爲第二高等學校長。

皆不久而罷。○十道謂畿內八道及臺灣。

◎晚泊

孤鴻翻影落蘋洲。風戰枯蘆寒月幽。隕色蒼然煙水合。笛聲何處不禁秋。

◎園田抱瓮。贈諸葛武侯畫像。柳原篁洲先生書明方正學述贊。

賦此以謝。

諸葛武侯夙所慕。有明正學亦傾注。君今贈我宗臣圖。上有希直述贊句。誰書之者柳篁洲。篁洲先生木門路。贊辭洋洋字楷正。畫像溫恭有風度。一幅偶爾集三賢。千里飛來若有數。拂地焚香挂壁間。再拜稽首歎奇遇。方今天下事黨爭。有似三國鼎峙暮。至尊宵吁社稷憂。精忠大義誰馳騁。風雲慘澹跳魑魅。黨同伐異失烏鷺。網常民彝安在哉。四千萬人泣岐路。鴛鴦本雖非匹儔。欽仰私淑欲趁步。日夕拜觀對盛容。他年倖得排煙霧。噫忠臣贊醇儒書。君之寓意不須顧。

◎和鹽谷修卿壬辰立春與函館井口某賞雪於湖心亭席上賦示之什

曉起推窗神骨寒。凍雲千里雪漫漫。水精世界鳥迷樹。雲母樓臺人倚欄。短棹剡溪乘逸興。蹇驢瀨岸試吟鞍。悔羞東郭敗餘履。偷作袁安僵臥看。

◎二月十一日夜大雪

大雪滿千山。寒光與月潔。萬家齊玉成。何有富貧別。

◎消夏吟節一

偶來古寺意悠哉。一榻清風美睡催。醒後始知山雨過。支持殘夢聽遙雷。

◎金龜城晚望

杉浦鴨渚孝本

登臨千里入雙眸。金龜城頭風色幽。斜日射雲瞻嶽暮。蘆花散雪靄湖秋。數行哀雁催歸思。幾處寒砧引客愁。萍跡多年猶未定。依然天地一沙鷗。

◎天長佳節 恭賦

五彩瑞雲繞紫闌。陸離車馬簇金門。扈從冠冕連鸛鷺。畫戟元戎列虎賁。萬代鴻基南嶽壯。千秋寶祚北辰尊。普天率土仁風遍。異域來賓盡浴恩。

雨山曰。二首一悲壯悽婉。一鏗鏘雄麗。不陷纖弱。並作佳作。

◎秋夜懷感

第五年級 林富之助

月白天高秋氣清。悲風萬里客心驚。蕭條一夜關山夢。聽盡艸蛩四壁聲。

◎新體詩

◎海小舟

岡田杏次郎

(1) うき世の海に舟出して
うきねの夢を重ねつゝ
過ぎこし方はしら波の

(2) 聞きても厭へと歎きけむ

はやいくとせか梶枕
沖べはるかに漂へば
たちも騒ける斗りなり
うきよの海の習ひとて

波のさわぎにしく風の
うらやすからぬ時々も
かげにかくれて安らけく

音すさまじき折々も
山としたのむ親舟の
渡りさよしを思ひきや

(3) あからしき風ふきおちて
荒れたつ勢ひすさましく
あやめもわかぬたうち
碎けて見ぬすなりにけり

あはやといふまもあら波の
肝もこゝろも失せはてし
思ひたのみし親舟は

(4) ゆくへも知らぬわた中に
かゝらむ島のかげもなく
漂ふはてやいかならむ

梶を絶えたるあま小舟
よるべも波にもまれつゝ

(5) うな原とほく見渡せば
黄金白銀つみのせて
たのしみあそぶ舟もあり

うきよの海のうき寶
なげきをよそに安らけく

(6) 時をわがほに帆をあげて

矢よりもはやき船脚に

勢ひたけく舟をきり

(7) 千尋の底のましら玉
沖べはるかに漂ひて

(8) さもあらばあれ捨小舟
神に任せていたつらに
漂ふ海月骨もなく

(9) 學びの海の末とほく
いにしへ人の残しけむ
いざこぎ出てむあま小舟

(10) いざ漕ぎ出てむあま小舟
かちとる腕はやせたれど
行くてはるけき海原や
すさぶ塩風吹かば吹け

勇みきはへる舟もあり

龍のあきとの玉得むと
心そらなる舟もあり

もろきうき身の行末を
心むなしく手を束ね
はかなくのみや朽ちぬべき

はてむ港は知らねども
みをつくしをばたどりつゝ

あやつるすべは知らねども
心ひとつにさして行く
怒るあら波立たば立て

◎虹の歌

第四年級 野村義雄

蟬の羽衣薄きだに、
鳴きしきるかな松蔭に、
そよと吹き来る風もなし。
一むら過ぎし夕立の、
西のあなたを見渡せば、
七つの色に彩りぬ。

夏のあつさや堪へがたき、
呼ぶとはすれど風雨を、
雲は東に散り行きぬ、
うれしや虹のたなびきて、

◎星

第四年級 河村喜一郎

あはれ寂しくゆきくれて、
つらき旅路を泣かんととき、
みそらにひかり輝きて、
げまも希望のかけなれや。
又夕暮は静かにも、
天地をつゝむくらやみの、
破軍の星を導きて、
ひとり正氣の光あり。

闇路に迷ふ世のひとの、
わづかにしらむ東雲の、
雲井にかゝる明星は、
西山かげに日は落ちて、
魔の聲たかき大空に、
高くてらせる北斗星、

◎今の世

第三年級 清水省三

みそらに高き星のごと、
みがくこゝろは武士の、
おもかけ遠き昨日今日、

谷間にむせぶ水のごと、
佩べるつるぎの鏡には、
「義」の聲いづこ跡もなし。

あさひに高き富士の嶺、
たぐひ稀なる日の本の、
たかき聖のかゝげたる、

月かげきよきにはの水、
國のひかりと仰がれし、
「徳」のともし火影くらし。

開けゆく世と誰か云ふ、
いつはり多き今の世の、
貪りふかきにこり江に、

このみしげし四十年、
たゞ己れのみ幸あれど、
「慾」の浪のみみなざりて。

もとより暗き闇の世に、
夜半に嵐をまたすとも、
さらでも狂ふ人の身の、
建 國 二 千 五 百 年、

導くつきのかげもなく、
人のこゝろの花ちりて、
悪魔のわざと悟らずや。
むかしおもへば敷島の、

大和にしきの色あせて、
うらむ涙にさけぶかな、

櫻の花の香やいづこ、
誰れか此世を救ふべき。

◎和歌

◎蜂腰數首

岡田杏次郎

賤か岳血しほふらしゝあとなれや紅葉の色もよに似ざりけり
ちりのこる古き瓦のかたはしよ不破の關屋のむかしをぞ思ふ
小早川流れみだれて關か原石田の堅めくつれそめけむ

(賤が岳)

(不破の關)

(關が原)

◎和歌四首

第五年級 宇野順

うつくしきしづはた山の紅葉はたか織りなせしにしきなるらん
何れをかまことの影とながめなん田毎にうつる秋の夜の月
打しきるきぬたのひきとたねけり夜や更けぬらむ吾も寐なむ
さらぬだに寐られぬ旅の憂き思ひいかにせよとか秋風の吹く

(紅葉)

(月)

(月前の砧)

(旅中の秋)

◎疎香

第五年級 松居源四郎

たけら男の歌にたへなるひきあり涙なき人よ知るべくもあらず
弓とりて白羽の征矢をうちつがひ魔を咀ふ子のおもわやさしき

あけがたの若葉の上に星一つきらめく頃を君逝さましぬ
夕暮を梅の花散るおばしに歌思ひおれば月さしいでぬ
みぎとひだり梅の林をひかへたりわが住む菴を梅香菴と云ふ
姉君の櫃おくりてかへりくる擾の森に子規なく

◎和歌十二首

第四年級 野村義雄

春の夜の月はおぼろにかすめども花の光はさやかなりけり (月下の花)
白妙の梅のこずゑをたづねきて調もおかしうぐひすの聲 (鶯)
としごとనికిどり色添ふ松が枝の千代の榮は君を見るべき (寄松祝)
月か瀬の梅のはやしやちかゝらん花の香おくる春の山風 (月々瀬)
けふあすこまちにまちなる櫻花あしたの風も心してふけ (待花)
きのふまで見ぬし浪路もわかぬまでかすみにけりなわはち島山 (春海)
空たかき雲雀の聲を聞きながら春めく野邊に若葉つむかな (野遊)
小夜ふけて人がけもなき里川の堤をひとりこふ螢かな (螢)
うき草にすがる螢のかげきよし露の光も池まうつりて (池の螢)
君か代の千代を調ふる松風は樂しき琴の音よかよふなり (松有歡聲)
梅櫻いまは跡なく散りはて、青葉すしくあめそゝぐなり (首夏雨)
君が爲め屍を野邊にさらすとも千世に遺らん君が勳功は (遠征中の軍人の下に)

◎和歌

第四年級 田中藤六郎

少女子のふし面白くうたふうたにみとしもしるき早苗植う見ゆ (早苗)
いつのまに夏は來にけん我庭のこずゑの若葉風そよぐなり (新樹風)
なごりなく夕立はれて城山のまつのこずゑに三日月ぞすむ (雨後三日月)

◎和歌

第四年級 那須開神

急ぎゆく道にはあれど鶯の聲さく時ぞたゞすまれける (鶯)
かゝなつばはや一とせとなりけり去年の今日しも君とわかれき (友と別れて後の歌とも)
ちはやふる神のめぐみのあらはれてなぬにし草も露をむすびぬ (友の病の全快を喜びて)
まがつ日のあらふる神のぬやみをばしなどの風ぞ吹き拂ひける (同)

◎うた三首

第三年級 清水省三

山の端をすぎにし雲のあと見れば木々のこずゑにつゆの玉ぬく (村時雨)
消え残るゆれのまがきの梅が枝ははや春うたふうぐひすのこゑ (初開鶯)
たちこめし鳩のうらわの朝霧にそこはかとなき多景のしまやま (湖上霧)



雜 錄

◎江州第一中學校 (日本新聞所載)

三十五萬石の藩主の居りし、彦根金龜城内に建築せられ候、故に市塵到らず好位置に有之候、校長は曾て山形縣の中學校に教鞭を把られしといふ市瀬禎太郎氏有之、縣下有數の教育家に候、從來中等教育に餘り縣民に歡迎せられざりし同氏赴任以來中等教育の必要を鼓吹する爲め、自から縣内に出張し父兄に説話する等、献身的熱心に依り今や生徒も増加し、第二中學校を設置するの運に相向ひ申候生徒は現今四百五十名として、其中寄宿舎に在る者百、二十、三名なり、これは寄宿舎の建物不足せる爲め、少なきにて校の意としては、全生を寄宿せしむるの目的を持し居り候、寄宿生の食物は自炊制に有之候故に、食物に對する不平は更ら無之候

校風は温厚篤實志操堅固と許すべきに有之候、由來江州人は天秤棒一本にて、家産を仕上げたる祖先のみに有之候、故に于今學問を重要視するもの尠なく、從て學問に勇氣無く生徒の如き談笑の間にも、カナワンといふ、自棄の嘆聲を起すの性質有之候につき、この處女的氣質を排除せん方針にて、前々校長(日本濟美會長今井恒郎氏)の如き、尤も氣性鍛鍊に工夫せられ尋で現校長も亦た此の點に留意せられつゝ、有之候結果、生徒の資性漸く變化し、校風亦た振起し遙か京大阪より負笈勉學する者多く相見へ申候父兄懇談會なるもの昨年開かれ爾後毎年適宜の時機に開催すべきことに相成候、これは申上ぐる迄もな校と父兄の意思を疏通する機關に有之、隨分有益の事柄も此會にて協定解決せられ申候修學旅行は年一回舉行致し候、費用は校費にて幾分を補助し、他は生徒一人毎月廿五錢宛を納付しこれを以て支辨致し候、困苦欠乏に耐ゆる精神を養ふの目的にていつも軍隊的行軍に有之、時々數日間の糧

米を各自に携行せしめ、寺院等に宿舍することも有之候、冬季雪中には校附近の山に分け入り、兎狩りを催することも有之候、此舉は誠に勇壯にして氣性鍛鍊を資すること尠なからずと存候、各團樂して雪中の苦を話しつゝ、當日の獲物を喫ふことは如何にも愉快と相見へ申候生徒間の情誼を深厚ならしめ併せて理想及文詞を發達せしむる爲め、崇廣會なるもの組織せられ居り候(今井氏校長の時より)これは生徒時に會同して談論し、以て暢情展意し、又毎月一回雜誌、崇廣を刊行して各自に願ひ申候其費用は自費、有之候

寄宿費は一ヶ月一人六圓五拾錢に有之候、此の中は間食費も含み居り候、而して此費用は父兄より舎監に送金し舎監は生徒毎に銀行貯金通帳に登記し、銀行に預け入れ必要あれば本人より申出で、舎監の認印を得て初めて現金を入手するの仕組に有之候、故に寄宿生は誠に品行宜しく有之候、他に餘り聞かざるとは全生徒午飯の時に當り全教員も生徒と同じ

食堂、而かも各生徒間に介座して談笑の間に喫了すること有之候此の間に校長以下は辨當の女子的な小なるもの、又は美食するもの等を視察し矯正するの策を施し候、又校長の校用にて何日間も他出登校せざることをあらんとするときは豫め全生徒を講堂に會し、校長自から其登校せざることを告げ、其間の學業暴行等の注意を訓諭し別を告げ候ふこと有之候是等は些事なれども校長と生徒間温情を増すの方法にて至極面白く存候

入學式には父兄を必ず登校せしめ先づ父兄に校の取る方針を校長より告げ此の方針に賛同したるものとして始めて其子弟の入學を許すの定め有之候、此のことは地方にては中學へでも入學せしめんとする父兄は多く子供を學者に仕立てる積りの心得を持つものを醒覺せしめ申候、かくして入學せし初年生は古生徒と相互に兄弟たるの約束を結ばせ申候、其式は初年生講堂の一隅に整列しありて、生徒の惣代其前に來り惣代何某なる由を告げ爾今親睦せんと

を希ふ意を演説致候、以上は現校長赴任後規畫せられしこと多く有之候、第二中學は評判餘り良く無之候得共能く知り申さず候故に申上げずこれにて擱筆仕候頓首

◎右の批評に付きて

右に掲げたる江州第一中學校なる記事は去る八月廿三日の、「日本」新聞上に掲載ありしを、こゝに又轉載したるものにして其何人の投書せしものなるかを知らずと雖、殊の外事實は相違せるもの尠ながらざるを以て、こゝ之を訂正すべし、又聊か評判するところあるべし

一、「校長の献身的熱心によりて今や生徒も増加し第二中學校云々」と有之候へ共、勿論校長が縣内巡回して大に中等教育を鼓吹せしために、生徒の増加致したるは、實にこれに相違無御座候、併しながらこれが爲に、第二中學校を増設せられたりとは如何にや、已に該校長の來任以前に已定せられ居候、

不存候へ共、これは毎月拾錢といふ崇廣會費中より、其幾分を此部の爲に收め居るものに候、七、「寄宿費は一ヶ月一人六圓五拾錢云々」と有之候へ共、これ又相違にて、尙壹圓高く候、即ち一、二、三年級は一ヶ月七圓五拾錢にて查、外套、制帽、制服、教科書の如きは、臨時費にて、他の小費は、此七圓五拾錢中を含み居候、又四、五年級は八圓の割に有之候、これにて一ヶ月に殘額を見留むるものも有之候、

八、食事の時、諸先生と介坐するは事實にて、他校には例なき事は不存候へ共、中々結構なる事にて、自然の裡に交情の融和するもの有之候、九、寄宿舎金錢の出入には、銀行通帳の外に、請求簿なるもの有之、これに含監の認印、買求品及其金額を記し、もしこれなききは、銀行は決して現金を支拂はず候、而して休暇の節（暑中又は寒中）此帳簿を其父兄に檢せしめ又認印を得せしむる規定に有之候、

二、「百三十三名云々」とはこれ亦相違に有之、いづれは此數に至ることあるに致せ、目下にては、百七名に有之候、

三、天秤棒一本云々は實に校長の屢々我等を戒め給ふ爲にせられ候言に御座候、この商人氣質の爲に、江州に於て學業の重要視せられざるは事實相違無御座候、

四、管外より入學するものも有之候へ共、可成的管内より募集せらるゝ傾きに候

五、然り鬼符、雪合戦は嚴寒中、雪積つて厚きとき、こよなき樂みも有之候、本校生徒は、壯んに之を好み居候、中々愉快なるものに有之候、

六、「毎月一回雜誌云々」とは全く架空の事實にて到底我等學生は、學課を放棄して、此爲に致す譯にもせむらず、何分學課と經費との爲に、毎年度に二回に過ぎず候、これにても随分多忙に有之候又「その費用は自費云々」これは如何なる意味か、或は一冊々々を自費にて求むる意かは

十、「古生徒と互に兄弟の約云々」は少々事實に有之候へども元來本校は三、四、五年級生を以て兄弟とし二、一年級を以て弟分となすに有之、別に新入の一年級のみを以て新參の弟分となす譯には無御座候、

十一、第二中學校も亦中々評判悪くは無之候、中々活氣のある風に有之候、（S、か生）

◎遊學せる友の怠惰を戒むる文

第五年級 山本小五郎

拜啓暑氣漸く退き燈火親むべく運動の好時季と相成候貴兄愈御清康之由奉賀候回顧すれば分袂以來已に二年の久しきを經過致候實に光陰は矢の如し偉業何れの日よか成ると昔人の慨かれしも理りあることにて優遊爲事もなく日を空ふしては小業だも成し得べきにあらず況して大業などは到底望むべくもならず男子此世に生れ草木と同じく朽ち果つるは口惜しき事に候然るに小生が如きは曩日に比して身軀のみ肥む左程學智道德の進歩を見ざるは其罪光陰を惜まざ

るに期すると悔悟の念に堪はず今後は益學業に従事仕る考へに候間乍慮外御安神被下度候君は御上京以來昔の鄙び古びたるものと事更り見るもの聞くもの盡く物新しく謂所夏を用ゐて夷を變じたるの感有之さぞ非常の御進歩ありしこと、存候御地の状況など御報導の度毎に朋友どもに相傳へ皆々欽羨致居候さりながら聞く所によれば世間一般は漸次華美に流れ大臣大將の邸屋は勿論所謂紳士豪商の家宅等はいよゝゝ善美を尽し庶民の衣冠益華かに從て國の大本たる學徒の氣風もこれによりて推量せられ高樓に座するものあり劇場も遊ぶものありこの輩何の志なつてか世に生れ何事をか成さんとして天涯に學ぶかこれが了解に困み申候彼の希臘の事を思はれソクラテースを慕はれ國家の行末如何なる事ぞ不相變碧眼奴の辱を受くるかと思へば慷慨悲憤の至りに堪はず候當地は固より未開の地にて何事も慥かなる事實は聞くを得ざること、存候へ共近頃風説によれば君上京以來常に惡友と相交りたゞ遊戯を事とし目的なる勉學を

怠り或は學資金の多き學業成績の宜しからざることを承はり思へらく君の志を以て何ぞ光陰を惜まざらんや君の節儉に於て何ぞ金錢を徒費すべきや君の廉恥を以て何ぞ人の笑となるべきや是全く譏誣なるべし信するに足らずと捨置候處其後數日にして他より聞き及びこゝに於て少しく疑ひ再三再四聞き訂し申候處果してこれが事實と斷言するもの有之且は驚き且は恨み言ふ所を知らず御尊父は非常の御立腹よて家名を汚す敗子と呼び賢母は殊の外御心痛にて君の改心を祈り是れが爲め御家内風波穩ならず實に傍觀するに忍びざる次第に御座候抑も風説は次第に膨大するものにて君が事なれば實際は當地よて流傳致候程甚しからずと信じ居候へ共非常に惡き評説よ候東京は都人士の最も多く集る處よて勉學には都合宜敷なれど從て惰落書生の街巷を徘徊して國風を害するが如きも亦夥しく知らず知らずの間にこの惡風に染み亦惰落生は善人を已れが徒に陥れんとするものなれば遂に君を懶惰に誘ひしならんと存候君平生

男子の志泰山の如しと生に語られ夙に君の志を樂み又故郷を去らるゝの時學若し成らずんば死すとも歸らずこの壯言を唱へられしに非ずや思ふにこれ必ず丈夫の奮て學を習ひ以て偉業を奏するの深意ならむと君の父母兄弟朋友皆以て君の爲すならんを待ち居候その言未だ耳を去らざるに已に情心を起し遂に學はず何故に父母兄弟を欺き朋友を偽り給ひしぞや上は國家よ不忠に下は父母に不孝朋友に不信にして君は以て恥となさるるか曩の直言は水泡に期し大志は中途に挫折し一として取るべきものなし今にして改めざれば何れの日にか國恩に報すべきや昔し英雄は皆貧困に出で富者に少きは貧賤は困苦を嘗め富者は安逸を事とす則ち困難は志を固堅ならしめ安逸は志を溺らしむこれに因て安逸は青年の求むべきものよあらず況して已れの一時の慾に驅られて百年の大計を棄つるが如きは君の平生に似はしからざる事と嘆涙止め難く候しかし人皆過あり過を改むるが故に之を賢者といふなり故に古語よも過を改むるを憚

る勿れと申候君果して過を改め益智徳を研かれなば忠孝の道愈大に成業は掌を反すが如くと存候諺に良藥は口に苦し諫言は心に逆ふと謂ひて凡て心に悦ばざる言こそ反て探るべきもの有之候野生は智淺く徳少なく人に言を勸むるが如きは少々過度なる生意氣かと存候へ共狂愚の言聖人は之れを選ぶ千言の中心必ず得る處あるとかにて拙筆と雖も君の白眼を以て之れを選ばゞ又得る處有之事と存候君猶ほ故人の情を察し鄙言を容れらるればその喜び唯だに小生のみに止まらずと相考へ候勿々不具

◎崇廣漫錄

第四年級 賀來 俊一

○試験點と從順

教科書の暗誦に汲々として、試験點の一点、五分を争ふは元より不可なり、自ら學生外の學生を氣取りて、試験に抗するこれ亦不可、試験點は表面の点なり、教科書は表面の書なり、さはれ、妄りに表面より、逆ふは元より不可、大不可、寧ろ吾人は彼等をして日々校門を出入せしむるの必要を見ざるなり。

要は修養にあり、實力にあり、表は此教科書に服従し、裏は即實際の修養に存す、試験点何者ぞ、席次の上下これ又何ぞ、諸子は表面のみに精神的従順を學ぶ勿れ、試験に際し、——神聖なる試験場に臨みて、——曰くカンニング、曰くスライ、等の忌まはしき不義不正の言を耳にするは、實にこの一大真理の存するの理あるを悟り得ざるもの、咄、汝は天晴れ男の名稱を持ちながら、偶々先輩諸先生より此訓戒を耳にするを、恥とせざるか。

○言と行

脳の指示する所、口に之をいふを言といふ、目に之を顯はすこれを行といふ、口はいひ易く、行は成し難し、言行並び行ふ、これを言行一致といふ、言行一致する之を人間といふ、堂々たる人倫の大道、もし之を躬行せざんば、若かず、禽獸虫魚、蛇にも、みゝすにも！

週一時間の倫理講談は、聞くが爲に非ず、行ふが爲のみ、僅に週一時、もし其訓話を聞いて直ちに躬行

せよ、實踐せよ、例令一學期、之を聞くこと再三再四、何ぞしかく之を聴聞するの必要あらんや、しかも諸子は甘く口に、これをいふに非ずや。言行一致——躬行實踐、——諸子は直に之を學ばんとするの勇氣はなきか、否々吾人は斷じて、諸子が之を口にし又之を行ふの勇あることを堅く信ず。

○我に悲しむべきあり

我に悲しむべきあり、苟も人一度其言を口にするとよく之を行ふの勇なきは實に悲しむべきの至りならずや、吾人は信ず、初の言後に之を行はされば、例令詐偽、謀詭のそしりを受くる是れ當に然るべきの事なり、その時に當りて、之を行ひ得べからざるの理由あるは、これ事の止むを得べからざるもの、とはいへ其時に臨むで、再び之を明言すべきは當りなすべきの事。

我に悲しむべきあり、嗚呼これ何事ぞや、言行一致して一致せず、而かも其理を詰らるゝに及んで之を一片のごまかし手段にくるめ上げんとは。

○勝ちたるに非ず、

負けたるに非ず、競争の眞價値は、元氣の如何を示すにあり、これ〱を最も要とす、優者は劣者に勝つ、これ當然の理のみ、唯々劣者は優者に劣らざらんことを力め、優者は劣者に及ばれざらんを期す、勝敗は時の運、天の命、區々之を争ふは愚陋なり。

これ試験場裡、スライの卑行あると同一の眞理を有す、その「オノレおれが勝つて見せるぞ」といふ氣はよし、最もよし、又かくあるべきなり、然れどもこれが爲に——勝ちたいが爲に——精神を腐らし、元氣を消耗するが如きは、我々風の睥睨一喝、叱咤一叫、するところ、唯々一時の勝は再び兎の緒を締め直し、一時の敗は層一層の研磨修養を要するの、二大活精神あるを要するのみ、

競争の眞價は、精神と伎倆の二者にあるのみ。

○苟も笑ふ勿れ、苟も言ふ勿れ、苟も謠ふ勿れ諸子は何故に造物主の賜ひたる口なるものを煩はすの暴なる、

口は禍の門とやら、又口は幸の戸口とやら、口の要たる食と言のみ、

鹽大の口、豆小の口、つら〱之を精神上は翻慮せよ、口の——唯一ツの此口の——要も亦偉大なる哉、抑々又恐るべきくせもの、なるかな、

笑ふ門には福來る、惠比須大黒の畫像に恐らく笑はざるはなかるべし、揚扆妃の一笑、姐已の一笑、宰相の一笑と賤妓の一笑、

諸子夫れ考へ見よ、暴笑亂洒人は狂とやいはん、口の開閉は人の品性を左右す、諸子妄りに笑ふ勿れ、琵琶法師の一曲、シンガーの一彈、靜御前の一拍一舞、沛公が一舞、諸子夫れ考一考せよ、同じく手を搖かし、口を勞す、而してかくもその美異なるは何ぞ、口の開閉は人品を上下す、諸子妄りに謠ふ勿れ、十字街上一壯士の演説、尻をからけて喋々落語家の講談、法僧頭を撫で、「サテ六字の名號の説教、わけては孔子三千の門弟に一言一句、蘇秦の辯、張儀の説、新島襄が一片の演説、志士扼腕す討幕攘夷、

尊王の血論、諸子夫れ考熟考せよ、

嗚呼口や〜、一言や一句や、其一國の權を雙拳に握る公使の談判より、下は妖言詭語客引く女中の口元に至るまで、皆これ二ツとはなき口の作用、僅かに一ツよりはなき——此口が——同じ機能を盡してアといへば開き、ムといへば閉さがる口が、かく迄其人の品性を左右し其位置を上下するは何ぞや、嗚呼これ精神のみ、精神のみ、乞ふ諸子妄りや笑ふ勿れ、苟も謠ふ勿れ、抑々又苟も言ふこと勿れ、精神より笑へ、精神より謠へ、精神より言へ。

○汝は何が故に學びつゝあるや、喝、
所聞寄宿舎の一人語つて曰く、予は校を卒ふるの日、
國家を益するものに就かんか、已れよ利あるものを
選ばんかと、

予之を聞いて、茫然——嗚然——慨然、暫くは開いた口が閉ざし得ざりき、已にして憤慨又齒を喰いし
ばりぬ、

咄汝は何が爲に學びつゝあるや、彼等は雑誌の文壇

が爲めに學びつゝあるや、これらの輩は宜しく今日より我門を辭して遠く古への支那の域に入るべきなり。

○海月と文字

文字に活きたるあり、死したるあり、骨なきものあり。骨なき海魚あり、海月といふ、「浮草や今日はむかふの岸に咲く」的に身を風波に托して猋の如く飄の如し、雖然、快なる哉此小魚——此憐れなる小動物は——見事纖軀を曝大無限なる大海洋の中に醜在せるとは、骨なき文章、死したる文字、字引より集りて、一枚の原稿用紙を埋めて意得々たる文字は全く骨なふして全く死し、全く死して全く骨なし、哀なるかな、遠くして渺茫、廣くして幽々たる我文海は、此骨なき動物を棲ましむるの余地を有せず、遠く浮ぶ事を得ず、廣く漂ふ事を得ず、寧ろ糞壺の片隅に蟄居すべきのみ、

噫々諸子此海月にも劣る、此雪隠虫文字を學ばんと欲する^か、之を以て意揚々たるべき^か。

六十二

に、演說會の演說に、堂々國家有爲の青年を以て自ら任ずるの徒なり、而かも其途を定むるに當りて實に此言を爲す、卑屈か、無謀か、白痴か、瘋癲か、即ち吾人は此筆紙を藉りて筆誅せざるを得ざるなり嗟夫、咄汝知らずや、吾人は何が故よ今日生れ出でしか、先輩は何が故に一線の導火線を殘し給ひしか、吾人はくれぐれも國家てふ文學を教授されたるにあらずや、嗚呼咄汝よ、予は今日此言を聽いて無念に堪へざる也、汝は今日如何にして此中等教育を受くるを得しと思ひ居るか、果して汝が獨立此有難き教育を受け得ると思ひ居るか、國家といひ、社界といふは、何の事なるかを汝は解し得ざるか、又曰はん、今日汝は汝の獨立を以て此日常の飯を喰らひ、衣を着し得ると思ふか、餘は曰はず、

嗚呼吾人は殘念に堪へず、實に無念に堪へず、
 勲聖文武なる　今上陛下を奉戴せる大日本青年、
 小にしては我同窓に伍するの人々よ、吾人は再び此
 言を聞くの恨めしきと勿らんを希ふ者、汝は抑々何

○汝が凡ての企ては

雷の如くあれ——汝が凡ての企ては夏日の雷たれ、
電光きらめく事燦然、汝はかくの如く燦然たれ、
轟き響くこと驚然、汝はかくの如く轟然たれ、
尙汝はこゝに最も注意すべきものあり、
汝が轟然たらんとする前には、先づ燦然たれ、
始め事の企を報せよ、而して後に汝は轟然として其
企を遂げよ、汝が凡ての企ては單純なれ、簡潔なれ、
其事に當りては轟々磊々人目を眩せしめよ、人耳を
聾せしめよ、
事遂げたる後は、『夕立晴れて暉再び輝く』といふ心
を忘る勿れ。

○急なれ、緩なれ

吾生を此世に享けて十八、人生僅に五十齡、八引ゐて二殘る、一引く三、ア、ハ、餘す所は僅に三十有二、遅くて早き月日の小車、隙ゆく駒は脚元しげし、今や十八、學海に棹して以來短日月、前途悠々、幽遠漠々。緩漫、彼岸に達する何の日なるかを知らず、

急激か、舳艫の過つものあるを如何せん！、急ならんか、緩なれ、緩ならんか、急なれ、道を修め、學を習ふは急にしてしかも緩ならんことを要す、

○作るものにあらず、作れるものなり、途上大に悩むものあるを耳にす、曰はく「予はどんな文章を作らうか」と、これ吾人の屢々耳にするところ、咄何等の怪事ぞや、

人の思想は湧かすものに非ず、湧くものなり、自然に湧出すること溪泉の如く、天然甘露の趣味掬すべきものは自然に存す、人工の噴水は蓋し人口に過ぎず、一點の趣なく、一點の掬すべきなし、物に感じ事に激して、氣魂の凝るところ、思想の筆端は溢るゝところを、そのまゝ羅列せよ、無形の思想は有形の文字となりて、汝が魂と、汝が思、汝が精神と汝が想を潑瀾として迸ばしらしめん、これ汝が惱めるところの文章なり、所謂作文なり、文章は決して作るものにあらずして作れるものなり、

以上は恐らく此渦中の人たるなきを得ず、從來我雜誌は一般なる文學雜誌——一個の専門雜誌的に看來りしはこれ會員の罪にあらずして我崇廣の罪なり、

是非と思ひ見よ、諸子は中等程度なる一般の高からぬ學科と教育を授かり、つゝあるものにあらずや、決して何につけて其専門ならざるは夙に吾人の認知するところ、然るに此文的思想にのみ傾きて、終に我崇廣をして文學専門雜誌に歸せしむるは、實に吾人の快とせざるどころ、或は吾人の腦髓が、兎角に文的に傾き易き心理上の關係はいはずもがな、苟も種々なる中等普通の智識には、又何等を問はず普通の理想の起るべき理なり、これ吾人が筆先にあらはして其思想を發露せるものにして之を文章といふなり、吾人が普通教育に於ける一般の感念は、物理的、化學的、植物的、數理的、動物的、地文的、地理的、その又英習字的、圖畫的、習字的、用器畫的、文法的の何のその、たゞその思想の上下巧拙は

その文章にして幼稚なれば、汝が思想も幼稚なり、數理的なれば文章はその數理的をあらはし、卑劣なる思想ならば文章も即歴々としてその精神の卑劣をあらはさん、他は推して知るべきのみ、文に反して無闇に其文を衒ひ、其言を飾り、其意を枉げたるものは、決して作れたものにあらずして、作つたものなり、之を死文といふ、世に剽竊文のいまだしき言を耳にするは、或はかくる原因あるが爲め非ざるなきかを憂ふ焉。

○我雜誌崇廣

我崇廣を誦みて文的思想を養成するは元より然り、我崇廣を籍りて文章を研磨するも勿論佳なり、吾人の進んでなすべきところ。雖然、我崇廣を以て一般なる文學雜誌と謬ること勿れ、我崇廣を以てある一派の専門雜誌と誤思する勿れ、獨り一般なる美的思想、一般文的思想を描いて得たりかしこしとする勿れ、悲む哉、嗚呼悲い哉、我會員にして實に這輩のこれなきを斷言する克はず、否々我會員の三分の二

問はずあれ、かゝるその受けたる智識の特殊の思想は、盡く悦んでこれを受くべし、否々吾人は寧ろ這般の高論名説とはいはずとも、一般なる論説を希望して已まざるもの也、

我崇廣は我校の機關なると共に、これ實に諸子の普通なる思想が筆と墨とに依りて發揮せらるゝ智能學藝の啓發場にして、例令試験成績の四十点に垂々たる學科と雖も、此科に就いて諸子が得たる思想は、一も二もなく此原稿用紙に染め出すべきは諸子が任なり、當然の事なり、吾人は作れといはず、作れるならば作り給へといふものなり、即ち知らん、諸子が思想は湧くものにして又文章も亦自然に作れるものなることを、

乞ふ我紙をして慈文學者の專有物と謬る勿れ、我雜誌部をして慈文學者の集合場と考ふる勿れ、我校裡尙此の如き僻見を有するものゝその三分の二以上を占むるものありとは、噫！、

「クラブ」と「ストライキ」

試は眼を刮いて朝鮮の國を見よ、試に瞳を轉じて支那の國を觀渡せ、試に眸を凝らして我勞働者の社界を照らせ、

是非に及ばず、まなじりを怒らし臉を見張り、腕を振して我學生といふ社界を貌視虎視せよ。

卑むべき陰謀者が起す亂党、悔るべく詭謀者が起す暴圖、憐むべき小利汲々者輩が圖る同盟罷工、

社界の出來事吾人また知らず、雖然唯これ等の亂党暴團が企ては、一もその結果なく、却て害毒を社會に流し、一國を傷け、終には利刀一揮の下は血河の中に溺れ、銃刃一閃の間に屍丘の上に疊まれたりしことを知る、

眼を翻せば、學生の社界ア、又如斯企てのあらんずらんとは、其効はなく——其害毒は甚しく——其最後は如此無慘なる——名稱こそ英語でいへ、ストライキ、心は同じ同盟罷工、吾人は學生なり、終に立ちて社會の要礎となる、曰く將來の中堅國民なり曰く天下の羈なり、曰く士君子、法裝裝裂をこそ蔽は

尙義會、敷嶋クラブ、隼クラブ、城南クラブ、舍友會、八州クラブ、東雲クラブ、旭クラブ、叢雲クラブ、同盟クラブ、曙クラブ、其他各郡出身者懇和會等

にして彼等の目的はボート、ベースにあり、或は柔、劍にあり、相互の懇和を計るにあり、概するに彼等の目的は決して惡しきにあらず、否々良し、實に佳なり、又最も囑望すべきものなり、かのストライキの如き蠻行卑舉とは絶對的反對の者たるを予は明言す、

然るに人或は疑ふ、苟も文に武に崇廣會なる大組織を有し乍ら何を區々別々に如斯團體を起すの必要あらんやと、これたゞ／＼先輩諸氏よりも耳にすると

予は聊か之を辨明せん、世に常理あり、物はその思ふやうに運ぶものに非ずと、予は則ち曰はん、我崇廣會が我校裡幾百介の爲に設けられたるものとはいへ、日間の些事或はボートを望み、演説を望み、撃

ぬ社會國家の運命を引導一喝を與ふる曰く武士なり、抑々士君子——武士——中堅國民なる今日の學生が！、

嗚呼これ何事ぞや吾人は曰ふに忍びざるなり、

雖然道あつて——義立ちて——事に一致同盟するは

當然の理、又爲さるべからざるの事實なり、然るを何ぞや、道なく義立たず、徒に一致々々の聲を籍り、同盟々々の音に依頼し——烏合——し同心する

は何ぞや、何ぞかくも輕薄、麤の如くにして、而かも無法の横着を好むことの狐の如くなるや、これ等の同盟には自ら意を致して之に當るの人はなく、事一度六ヶ敷に至りては、我も／＼と先を爭ふて禍を避けんとす、嗚呼實に馬鹿らしくも大に戒むべきところ、寧ろ爲さるに若かざる也、吾人は曰ふ決してかゝる輕舉否々暴動には必ず虚勢に馳られて一致否々烏合する勿れ、もし義理分別人道の整然たるものには、一身一命を捧げて加盟努力すべしと、

今我校裡崇廣會を除いて尙十數の團體組織あり、

劍を希ふ其他ベースを望むもの、幾百介の一人其希望を充たすことを得べきに非ず、或は其一二を擧げて其者のみの希望を充たすに止まるのみ、他は已むを得ず其望を絶たざるを得ざるに到るは到底已むを得ざるの理にして、決して崇廣會其者が衆人の望を達せしめんとして達せしむべきに非ず、即ちかゝる同志は相募り相集まりて終に一つのクラブを組織するに至るものにして、言を換へて之を言へば即この幾多のクラブは蓋し崇廣會が區々分立して同じく崇廣會と同等の目的を達せんとするものに外ならず、されば決してこれをして無用のものと見做し、なすことなきクラブと誤認するは、其却て誤れるものと曰はざるを得ず、而して此團體組織なるものが大に各戒むべき所のものあり、曰く二、これ即ち義和團なり、東學黨なり、

予嘗て之を耳にす、ある團體、あるクラブと敵意を示し合ふと、或は聽く、竊かに崇廣の目的に逆らふと、又聞くストライキの本部に化し去らんとすと、

これ、これぞ、此整然たる目的——義理正しき目的——のクラブ其者が、終に義和團となり、東學党となり、勞働者の憐れむべき狀と化したる現象なり、吾人はあく迄其單純なる目的——体育懇和——の爲に決して他意なきを希望す、これその一なり、

苟も一旦加盟の意を捧げて、一致協力せんとするものは、あく迄精神の確乎たるを要す、事に當りて義理正しき諸子が、一旦男の面さげて同盟せしもの、あく迄堅固なれ、腦底の決心薄弱にしてたゞ一致々々の聲に驅らるゝが如きは、元より同盟するの必要なく、又かりそめにも同盟の名を與ふるに耻かしきもの也、蓋し其同盟者は一旦其心中に義と認定したるものへは、心を挾つて之に同盟すべく、其舉に當りて目醒しかるべし、義の爲にアヤフヤするものは不正の舉にも身の進退氣遣はしく、虚聲に馳せられて不義に誘はるゝは理の當然なり、其腦髓の確乎たるは其途にあたりて大に戒むべきもの也、

將來世に立ちて天下を左右するの諸子、士君子

我崇廣は全校の機關なり、雜報は此機關の機關、此機關は雜報なる石炭の供給よりて運轉せられつゝあり、吾人は明言す、文苑は唯景氣添への物に過ぎず、而かも我崇廣の雜報寂寞、無味乾燥、日誌的文章に過ぎざるは何ぞ、如何ぞ石炭の供給少なくしてよく機關を運轉するを得んや。

○武士道

一振の秋水三尺五寸、腰のものに一身の精神を詰込み、心は清廉にして櫻のごとく、高潔にして峻牢梅の如く、義一偏の爲には、一身妻子の愛惜を顧みず、之を稱して武士道といふ、之を稱して日本魂とはいふなり、

諸子夫れ如何、今や我校柔道を設け、劔道を置き、師を請ふて武道を鍛鍊するの好運に際す、武道は精神なり、魂膽なり、術は精神によりて始めて熟す、之れ決してベース、ボートの如き術は非ず、破れたる袴の裾には毛蔘々、韋駄天の如き脛をあらはし、古びたる小屋襦袢の袖には鬼をもひしく鐵腕を突出

中堅國民は、其將來に於て如何なる舉を揚ぐるも、諸子が將來と今日は決して異ならず一は大よして一は小なるのみ其目的其舉行に於て………其精神に於ては何條異なるあらむや、蓋し此今日の戒言は乞ふ將來天下を料理する中堅國民の戒にあるを知れ焉、

其 々

古人の文を讀みて已が思想を修養するは、最も大に務むべきところ、先哲の言を酌んで之を已に求むる可なり、雖然其文を作るに當りて吾人は大に心得べき緊要あるを信ず、何ぞや、其文を摸し其字を擬せんとするの弊即ち是れ、妄に古文を摸せんとすること勿れ、妄に新派を摸せんとすること勿れ、唯其自己の修養し得たる文体の其儘を以て、自己の思想の其儘を發揮せしめよ、些々たる一小事これ實に我文壇の一大弊たるを知らざるか。

雜報と文苑

し、ギラツと脾みエイヤと投げ、精神を満身に込め氣合を雙眸に伺ひ、機を見てヤツ打突き、隙を覗ふてお面ツと打入る、整然——泰然——凜然——昂然、精神一ツの左右する所、エイヤの一言は精神の聲と化したるもの、体勢凜々、これ精神の塊なり、

武道の眞價は『まじめ』にあり、『神聖』にあり、然るを何ぞや、此神聖なる道場に出で、ダタ／＼笑ふものあるは何たる骨なし白痴漢ぞ、吾人は大に筆鋒を籍りて之に天誅を加へざるを得ず、尙此上に惡むべきは其苟も劔——竹刀——を手にし、或は形の禮法に跪坐しながら、冷然——ニヤク——と笑ふ奴あるは何ぞ、抑々何が可笑しいか、抑々此道場を以て縁日見世物と同一視するか、咄々、何等の無腸、無骨の頓問ぞ、吾人は這輩を見るにつけ、神拳一本參らするを快とする者なり、

武道の眞價は『まじめ』にあり、諸子夫れ大に三省せよ。

○友人の交り

世の輕躁浮薄なるもの何ぞ風潮以外に獨立すべき、我滋賀一中の學生社界に至るまで、此風を及ぼしたることのかく慘にして甚しきや——又其風は感染したることの如何に耻しく、愧汗背に冷やかなるにあらずや。

ズーッと見渡せ！、一點の汚れなき——純白高潔なる眼を刮いて公平に監視せよ、嗚呼口を開いて云ふに忍びざる也、一寸見ゆるスタイルに、鼻先さばかりの運動家、口先き上手の才子膚に、ソレ風呂へも行こう、一寸ビーフへ行こうと、他の目からも慕はしくも羨めしき交情、正月になれば謹賀新年の筆改まり、暑中になりては御見舞狀しげし、然かも其相會ふて語るところは……予は之を言ふの必要を見ざる也。

然れども茲に數百介の鳳雛、卵龍——中には又這輩を見下ろして嶄然一角を現はすものなきにしも非ず而して其數は至りて少なし、四百有餘の頭數ある中に、實に百分の十位に過ぎずと信ず、

は以前の友人なりしを忘れ、たゞひ出會ふても一面識なき体たらく、面らがまへ、一片の義なく一片の情なく、彼等はたゞ伴ふのみ、たゞ手を携ふるにすぎず、これ何するものぞ、汝は抑も何たる無神經ぞ、ア、何たる薄情なる人間ぞ、汝は如斯交りを結んで、得意とするを耻ぢざるか。然るに一方一角嶄然者流は如何に、

年賀狀の何たるを知らず、暑中見舞の何たるを悟らず、唯心に年賀を祝して壹錢五厘の其要あるを知らず、さればこそ此儀式は知らずとも、あく迄其心中友人の情義を知れり、義としては身命を其友の爲めに捧ぐるを惜しきものとは思はず、今日此交りは他日人となりてまた變せず、蓋し今日の夢は他日二頭馬車上の友人を夢む、

あ、何ぞ其義の厚きや、彼等の交情は交論激闘して又すく／＼厚し、これ即ち一角流の交情なり、諸予夫れ如何に、一は薄くして一は厚きものゝみ、大したる差違はなき也、然れども其精神や如何に、

さればこそ、此小公子流お坊様連は已れが中間の多數を頼みて、口々此一角流を擯け——笑ひ——罵ること一方ならず、

然してここに可笑しき現象あり、此小公子流は此一角流の面前に於ては木像の如し、口あつて物言ふことを知らず——否々をすることも笑ふこともなし得ざるなり、——恐しくも亦其威は屈れられて！

從て此一角者流は、どこまでも巍々として自ら任じ、常に朗吟集を手にして城山にささよひ、時に同志相聚りて口角泡を飛ばす、

從て此公子流はすく／＼手を共に携へ、ヤツ、ヨツの挨拶ものどかにして、朗らかは例令猫にも杓子にも、其親情の程のよさは誰かは羨まぬものはなく、又他に起る公達連は、ヤツヨツの間にさき込まれんとす——否々互にさき込み合ふて意氣揚々、又もや外出。然れども悲ひ哉彼等には一點の憐れむべきあり、何ぞや、彼等の交情は皮想のみ、裏には一點の義あるを知らず、事一つ逆境に傾き初むれば、彼等

其精神や如何よ、諸子乞ふ一眈其身を考へ給へ、人間たり友人たるの情義を忘るゝ勿れ。

○「様付け」連中皆起つべし

金龜城麓幾百介の頭數、彼等は善々の士なり、鏘々の人なり、といはんと欲して未だ之を曰ふ能はざるものあるを如何せん、今將よ吾人は筆を叱して此善々の士、しに一嗷一叫せんと欲す、彼等はいづれ劣らぬ將來中堅の民、然かも彼等が今日の社界には、數等の別あるは如何、耳を聳て聽く所あれ、彼等が社界の今日、其數等の區別を先づ明かにするものは、其呼び方なり、曰く呼び捨て、曰く君付け、曰く様付け、曰く綽名、呼び捨てにするも朋友なり、君付けにするも朋友なり、様付け又然り、綽名又朋友雖然、寄宿舍門限點檢の音に、相伴ひ舍に入るものは、呼び捨ての人なり、綽名の人、其情親厚にして互に呼び捨てにするは、濃なり、而して決して其人の奥、其人の眞情少しも濃かならざるを奈何せん、

一ッ違へば空中の魚たるを如何せん、土曜日八時半の門限、獨り豪壯、城山に攀ぢ、月圓かにし激波散々、磯打つ汀に高吟するの士は即ち様付けの人なり、拳を握つて獨り校門に歸るの士は、即ち君付け又は様付けの連中なり、全く伍なきが如く、友なきが如し、彼等は即ち様付けとなりて別人視せらるゝの人なり、人を尊んで様といふ、これ敬稱なり、今日彼等が社界は、愚物的稱語なるを奈何せん、様は愚物の別名なり、綽名なり、彼等の眼や卑やし、彼等の情や薄し、心あるの士よ、よく此處に注意せよ、果して如何なる士が様付け、——鈍的綽名——を冠せられつゝあるか、諸子誤れるなき歟、盲人は知らず、眼のある輩よ。

様付き愚的人物は皆、彼等以上の士なり、理想の士なり、着實の人なり、情義あるの男なり、温厚の人なり、犯すべからざるの人、彼等の所謂別物なり、今日迄愚的に解せられたる「様付き連中」

龍なり、頃日群大の爲に苦められ天外に飛翔するの氣慨なし、我は恐る其の或は普通の蛇を以て終らんか屢彼等を叱すと雖も、彼等馬耳東風少しも感せず、因て我は此の地を去り、將に江西の清地に到り以て、後日の大成を期せんと欲すと、予云はく、汝誤れり、誤れり、何ぞ死を決して之れを誡めざる、之れ又朋友の義務にあらずやと小蛇涙を流して云はく、吾之れを知らざるにあらず、然れども如何せん、彼等余の眞意を知らずして却て予を以て痴愚となし、敢て吾が言を顧みざるを、因て予は寧ろ充分に已れの修養を積み、然る後彼等に向て大に鳴號せんとす、君以て如何となすと、余笑ふて云はく、行けや汝江東の金龍、予は他日汝の大に鳴號するを待つものなり、嗚呼金龍行けや、

△世人の解する書生の意義

世俗多く書生さんの語を云ふ、此れ果して尊稱を意味するか、將に輕蔑を意味するか、遠く此れを世人に質すを待たず、直ちに已れが心中に反省せよ、若

よ汝等須らく其友を集めて驟然興起すべし、彼等の輕々輩何ぞ畏るゝに足らん、起て起て！起つて此等の輕々薄義の輩は一喝を與ふるの氣なきや、何ぞや全く自ら別人となつて隱居然たるや、汝は速よこれ等の輩をして喫驚せしめよ、汝の精神、汝の手腕を以て！

汝が將來中堅國民たるの時、汝が今日の精神と手腕は又必ず活動することあるべし、汝は將來隱君子然として世を渡るべき人間に非ず、——然らば即ち今日其心と腕を養ふは目前の急務なるに非ずや。正に、正よ、此時期に際して！

◎寸鉄錄

△龍を送る序

第四年級 廣瀬文豪

余嘗て水濱に逍遙す、時に一小蛇あり、將に河を渡らんことを、於是余戯れ問ふて云はく、吾が見る所に因れば汝は常蛇にあらず、何處より來り又何處に到らんとするか、小蛇云はく、吾れは之れ江東の雛

し疾しき所なくば則ち尊稱にして、疾しき處あらば則ち輕蔑たり、予は試に問はんとす。汝等父子親あるか、師弟敬あるか、朋友信あるか、理想は高きか、嗚呼然らじ、然らじ、否、然りと云はんと欲するも、云ふ能はざるなり、彼の學校騒動、ストライキ、あれ等はそも何ぞ、親が膏血とも云ふ可き資金を蕩費するは、そも何の爲めぞ、花柳の下琴瑟を弄し、酔酒に醉ふは、そも何事ぞ、輕々薄々、少しの自重なきは、そも何事ぞ、惡世人の解する、所謂書生さんの意味は、尊稱にあらずるなり、而して此等の人はよく未來の中堅國民となるを得んかと思へば、歎又歎、

△西洋の讀本と日本の讀本

夫れ書を読むは、只に之れを會得し、暗誦するを以て足れりとせず、常に已れが見識を以て、精細に吟味取捨すること最も必要にして、若しなき時は、之れ眞の讀書家と云ふ可からず。諸君は既に『リダー』を讀めり。予は知る、必ずや此の風土異なる

他國の書は、諸君が卓見高識の下に、種々吟味批評せられしを、

今此に予は淺劣を顧みず、予が所感の一端を擧げて、諸君に其れが是非を質さんと欲す。

予が感せし所や、文學上、思想上、或は教育上、固より多岐なりと雖も、就中最も予をして、奇異の思ひをなせしめたるは、此等の書物(獨の如きも然り)の我が國の讀本と異りて、所謂ゴットなる語、或は此れに類似する語句(グレートスピリットの如し)の非常多きことなり、此れ其の國体の異なるに因ると、冷然觀過すれば其れまでなれど、予を以て見れば、大に研究するに價值あるものとなす。彼の英米人の多くは沈着にして、道義行はれ、且つ冒険の氣象に富めるに反し、我が國民の輕薄にして、道義廢弛せしもの、或は此等に關係するなからんか、いづどや岡田實業學務局長の本校にて、英國教育の概況を話されし際、シャールベル會の事を云はれしが、此等も其の形こそ異なれ、其の實はリーダーの『ゴ

ット』と相一致するものならんか。乞ふ諸君の一考を煩はさん、

◎熱誠と忍耐

第四年級 近藤兵一

熱誠とは何ぞや専心極力、只其素志を貫徹せんと欲し精勵刻苦曾て晝夜を捨てず其熱腸は鐵をも鎔かし其専心は岩をも劈くを謂ふ忍耐とは何ぞや曰く僥倖を吾れ仇とし憂患を吾の師として以て千挫屈せず百折撓まざる堅忍不拔の志氣を謂ふ而して二者何物ぞや玉の光りを發せしめんと欲せば切磋琢磨せざるべからず安樂を得んには宜しく艱難辛苦に耐ゆべし、梅は霜雪を凌ぎて芳薫あり松竹は四時凋えずして節操全し。

偉大の事業には必ずや熱誠にして且つ忍耐なるを要す熱誠なるも忍耐力なく忍耐力ある熱誠なき時は如何恰も二者は飛鳥の兩翼の如く車の兩輪の如し一事業を成さんと欲し熱心に其成效を待つも忍耐力に乏しき時は遂に倦厭放棄して決して成效の曉に達せず

又事業に忍耐して從事するも熱誠ならざる時は決して成就の秋來らざるべし古人の言は陽氣の發するところ金石亦透る精神一到何事かならざらんとは蓋し是の謂乎

天を摩し雲を掃ふの高塔も一片の石一塊の土よりなる、雨滴も亦石を穿ち、千丈の堤も蟻螻の爲めに壞る滾々として晝夜を捨てずんば何事かならざらん嗚呼偉大なる熱誠力と忍耐力との事業に及ばず影響

◎農

第三年級 清水省三

初秋の野外、盈つる笑をおもたげにかくせる満目の稻穂と、そのほごりを一群の百姓其の辿りゆく景の如何にたのしき平和なる様をふくめるよ、「豊作」てふ語と「不作」なる言葉の、如何に社會人氣の消長に旁及するかよ。

吾人は豺狼のごとき肉食動物にはあらず、淡白純良なる穀物人種なり、東島國の特産なる米は、到る處に長田狭田のめぐみのつゆとあふれし、上は萬乗の至尊より、下は茅屋の賤民にいたるまで、四千餘萬

の生靈は實にこの「蒼生の食ひて生くべきもの」、保護の下に生活せるこそうれしけれ、見よ、南清楊子江岸の米穀夥多、しかも産するところのものは所謂南京米にすぎず、焉んぞ五百穗秋瑞穗國の神の賜に如かめや、斯の如く吾人同胞は、禽獸を屠らずとも、腥さ血を啜らずとも、南京米は優れる、吾人を養ふに足れる、天授の食料をもてり、蓋し世界の至幸者と謂つべきか。

野末に蔓りし鳥爪は、いか程多く熟するとも食ふべきの値はなからん、この有難き天の賜も、もし天然に委し舊習を守り、又土臭き營業として顧みざるの時んば、吾人は遂に腥き肉食か粗惡なる支那米に満足せざるべからず、農業の改進黨運を企圖するは、全く異臭を嫌ふが故なり、血の色を厭ふが故なり、空腹直ちに來る南京米を欲せざるが故なり、他國の產物に満足せざるが故なり、

軍備の邦家に於ける重しと、されど吾人は未だ食せざるの兵を聞かざるを如何せむ、糧食の給するなく

鹽菜の食するなくひば、赤心櫻のごとき、剛節梅のごとき六軍のつはもの果して大和民族の本色を發揮し得るや、朝に星のかやきを頂きて門を出で、夕に月の光をあびて家路を急ぐ農夫の、健やかなる黒き笑顔を見よ、その實直なる、無邪氣なる、淡き静けきたいすまひの、如何に吾人をして高く清く感ぜしむるかよ、これをかの中折の帽子に金縁の眼鏡、セルの脊廣にマニラくゆらす輕薄才子に比す、其差管は霄壤のみにあらざらん、又思へ、大文學者も、大英雄も、大豪傑も、大政治家も、大聖人も、彼等の形骸の此世に存在する間は、この農民によつて血液の循環を司られつゝあるにあらずや。

さり乍ら怪しむ、吾こそ軍人たらん、又商業家たらん、或は學者たらん、紳士たらんと、意氣を衍ひ流行に趨り、外面を飾るものは比々皆然れど、一人として、我こそ百姓たらん、農業をいそしめんと云へるもの、なきこそ奇怪至極なれ、聞説、こは徒らに才子ぶり當世ぶりて、本末終始を知らざる生物知り

のやから多しとか、そも痴か、狂か、咄。數萬の黄金を倉に藏し、冷なる金火鉢の傍に、慾の固体となりて蹲るよりは、鼻唄のふし面白き股引草鞋の土百姓たれ、肩書に世人を瞞着して、媚を權門に納て快樂を貪る奴輩たらんよりは、蛭の血吸ふ蛙のはどりに塵を忘れて早苗を植ゑよ、新領地臺灣島直經數百里、沃野廣漠、青草茫茫、そもく誰が鋤鍬をもちて耕されんとはする。

◎警鐘！

二三 理事

た、けば音あり、般々然として響く、之を鐘とはいふ。非常を警む、之を警鐘とは呼ぶ。而かも猥りよ世人の寂寥を破り、安眠を驚かすを欲せず。たゞ彼は靜かに、軒頭につるされて、安らけく希望の綱にまどろまん事を希へり。されど彼はそのチーチュアーに於て、よく人を警む。人の危きを見て之に告ぐるは彼が神より與へられたる職務なるよ。風雲漠々、四顧寒し。

猥りに人を驚かさる彼れ、點一點、何事をか、戒む。紅葉一片、破机に舞ふ。聲あり、耳を傾ければ

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

◎天は平等に苦を與へ、神は平等に樂を授け給へりと聞く。平等の苦、平等の樂、始めて吾れ人共と平和を歌ふなり。人あり、己れのみ勞働せしめられ、他は之を見て、その勞働を見て、微笑す。その人何等の感ある。識者、その勞働せしめたるものを見て何かいふ。

◎實踐は大空論の上に立つ。「論より證據」、云ひし事、行はれて後始めてその言の眞なるを知る。人あり、川に遊ばんことを聲言す、程へて忘れたるが如きを眞似し、敢て川に行かず。識者、之を見て何とか云ふ。

◎特別會員は大に會の爲めになす所あらざるべからず、而して特別會員が其會を代表する選手の練習を以て對岸の火事視せらるゝに至つては大に鐘をならざらるべからず。

◎一會を代表して其れが爲めに大につとめつゝある選手の練習に會員は冷淡にして敢て、慰問の意を表せず、一回の聲援なし、然らばその撰手果して其責任の重きを自ら思ふべきか。

◎人の非を喝するやよし、人の是を賞するや可なり然れども人を罵倒して衆中に耻かしむるや非なり況んや、愚弄、謗議至らざるなきに於てをや。余輩は敢て彼等を馬鹿と云ふ。

◎人を呑まんとするは眞の英雄たらんば能はず。蛇は蛙を呑まんとして、却つてそのあごを傷む。

(胡夷生)

秋風一過、音は絶えたり。又亂打するものあり。耳を澄ませば

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

◎「人の人たる所以は、その遊ぶ時にあり」とは文豪シルレルの語也。今の青年が如何なる遊びをなしつゝあるかを思へば……思半ばに過ぎず。

◎未來の紳士となりて國家のため大に爲すあらんと